

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	“安心して暮らせる町づくりをめざして” ～ボランティアと介護事業所との連携による在宅支援～
演者名	○新田 幸子 1 加藤 洋子 2
所属	1 兵庫大学健康科学部看護学科 2 兵庫大学生涯福祉学部社会福祉学科

目的

本研究は、ボランティアと介護事業所が連携し、A 町に住んでいる高齢者・障害者の安心・安全な生活支援のために必要な安否確認やサポートをどのように行っているかを明らかにしたので報告する。

実践内容

A 町で月 1 回、開催しているボランティアと連携している介護事業所の「地区を支援する会」に参加。A 町住民 846 世帯のマップから独居者・日中独居・老夫婦世帯を中心に「閉じ込めはダメ 地域全体で支える 徘徊できるまちへ」をテーマに座談会参加を呼びかけた。具体的内容は、「家庭での生活を支えるための介護技術指導」であった。訪問による参加を呼びかける中で生活支援や介護状況の実態を把握し、サポートの必要性を実感した。さらに、介護技術指導に参加した 21 名を対象に転倒防止への取り組みや片麻痺療養者の介護方法について指導した。

実践効果

地域における情報交換の共有により、A 町の緊急度の高い高齢者・障害者の実状を把握し、ニーズのアセスメントができた。そのことは地域住民による生活困難者へのサポートに繋がった。さらに、地域の介護事業所の協力を得て、療養者を抱える介護者に介護技術の指導を実施することができた。

考察

介護事業所とボランティアの連携による情報交換の場は生活困難者の実情を把握する上では重要な場となる。さらに、通常では見えてこない認知症や引きこもり、疾病を抱えて生活している療養者や障害者の実態把握も出来る。そのことは、①地域住民自身が地域の課題を解決する力量を培い、②地域住民のニーズに沿った介護指導を実践につながると考える。介護技術指導講習会の場で「お風呂で倒れたらお湯を抜けば良いのか」などの質問に、寒い時期には風呂、トイレで倒れることに注意しておくことや温度差は心筋梗塞や狭心症につながる所以需要であるなどの疑問に答えることができた。今後、さらに在宅支援の方策について追究する。